朧草子

中里恒子

文藝春秋刊

朧草子　奥附

昭和五十一年六月二十五日第一刷

著　者　中里恒子

装幀者　青山二郎

發行者　樫原雅春

發行所　株式會社文藝春秋

東京都千代田區紀尾井町三番地　郵便番號一〇二

電話東京(〇三)二六五局一二一一

印刷　理想社印刷所　製本　矢嶋製本

附物印刷　精興社　製函　加藤製函

萬一落丁・亂丁の場合はお取替へいたします

© Tsuneko Nakazato 1976

Printed in Japan

目次〈朧草子〉

朧草子　5
山姫　73
松襲　125
初音　175
鵲　201
收録作品初出誌一覧　224

题字

著者

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

朧草子

——中里恒子創作集——

朧草子

暑い夏の日盛りに、道成寺正面の石段を登つた。たらたら滲む汗を拭きながらひと足、ひと足登る。京の生れで、舞を習つてゐた友の西野あさは、願掛けをしたさうで、三年間續けて參詣した。從つて石段は、もう何度か登り下りしてゐる。道成寺鐘入り前の亂拍子は、この石段の數に合はせた運びになつてゐると言つた。

わたしは、それをひよいと思ひ出して、ひい、ふう、み、と拍子をとつて歩いたが、なにぶんにも、さういふ素養のないために、亂拍子といふことが、足の運びでは覺つかないが、なんとなく、早間（ま）で、ふうふうと暑い中を登つた。石段の高さが深すぎても、淺すぎても、足運びが違つて來る。たしかにこの段々は登つても登つても、まだか、まだかと思ふ。

僧安珍が逃げ込む。追つて來る清姬。その頃、この石段があつたのであらうか。道成寺は、敕願によつて大寶元年に建立され、僧義淵を開基としてゐるから、淸姬の鐘供養は、もちろんそれより二百何十年もあとの物語で、石段はすでにあつた。

しかし、安珍は、この寺内で、鐘の中で炎に燒かれて死に、淸姬は、入相の櫻となつて成佛したといふことになつてゐる。わたしは、それが本當にあつたことか、作りごとであるのかなどといふことはべつにして、女の情熱、女の妄執の象徵として、この物語を今に傳へる道成寺の境內を見物した。

本堂の前に蓮池があつて、身の丈を隱すほどの紅蓮が大きく咲き盛り、白い蓮の花が點々としてゐるのが、涼しいといふよりも、むつとする風に搖れてゐる有樣は、亂拍子の舞臺を見るやうであつた。

紀州の山の半分以上は、一族で持つてゐると言ふ山持ちの舊家に緣づいてゐるひとが知りあひにあつたので、わたしは、その家にも寄つた。じつとりした風の通る奧の部屋へゆくまでに、くねくねと廊下を曲り、どの部屋も、古い繪襖と簾戶で圍ひ、部屋の中にひとが居るとしても、廊下からは見えぬやうになつてゐる。

わたしは、やつぱり淸姬の生れた里だと思つた。……じつと抑へる、耐へる、何十年も同じ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

日が續く、他處からむやみに、ひとがはいれない、いれない、外へも、やたら出ない、出られない、物持ちが物持ちとして存續するためには、そのくらゐの抑壓に耐へる人間でなければならない。ところが、或る日、突然に、美しい僧が現はれた。僧は宿泊した。清姬は、ひと眼で僧に懸想し、僧に言ひ寄る。

わたしは、まるでこの家で、清姬の事件が起つたやうな幻覺さへおぼえた。

「修業の道すがらなれば、お許しを、」

「修業を終へたあとなれば、お許し下されようか、それまで待ちまする、」

「五日かかる、十日ののちになりまするやら、佛道に、かぎりはない、」

「お寺におこもりなさるのは、七日とききました、そののち、またこの道を通つて、東北へ戻られるとききました、」

「…………」

「されば、八日、おそくも十日のちには、またこの家へ宿泊なされよう、ほかには、熊野路は深うて、道がありませぬ、それとも海上へ出られまするか、」

「…………」

「お待ち申します、必ず誓つて下され、」

「…………」

「ならば、お供をしてお寺へ参り、おこもりのすむまで待ちませう、」

一途な山里の娘の熱情に負けて、僧は、必ず、ここへ戻ると約束した。しかし、十日經つても現はれぬ。これは、現代で言ふならば、結婚詐欺のやうなものであらう。それにしても、大蛇になつて追ふほどの執念は、閉ざされた日日にこそねつとりと釀成されるのかもしれぬ。一日一日、蒸氣を放熱してゐれば、これほどの大ごとにはならぬかもしれぬ。……

「どうぞ、冷たいうちに、」

わたしは、冷えた瓜の盛られた硝子鉢に、はつと眼を向けた。日も少し傾いて、土藏の影が、庭の向ふに見える。

「夕方にならぬうちに、宿へ着く約束をしてありますので、」

「お宿まで、お送りいたしますから御心配なく、」

「いえ、しらべたいことを頼まれてをりますし、そのひととの打ち合せも……」

客人のもてなしについては、萬萬、遺漏ないやうにとの申し送りでもあるのであらうか。清姫の頃からの、紀の國びとの習はしででもあらうか。やうやうに私は、その家を辭して目的地に着いた。

三年間、熊野詣りをするたびに、道成寺へも參詣したのは、わたしの友達西野あさの母上で、この人はすでに亡くなつてゐる。あさは、藝ごとに志す者は、一度は參詣するときく道成寺へ、母の熊野詣について、自分の藝の願掛けに參つたのである。

三年はおろか、一生でも、熊野へは、木田の……木田といふのは、あさの實家の姓である……母の代りに參らなければならない理由があると言ひ出して、わたしに打ち明けたのは、次兄が、行方不明になつたまま、もう七年になる。母の勘で、もしや生きてゐるとすれば、熊野の奥にでもゐるのではなからうか。死んでしまつたにしても、供養のために、熊野へは參りたい。困難な道中であるだけに、親の思ひが、その間だけでもまぎれると言つて、在世中は、父母といつしよに二度行つてゐる。

母が歿してから、父は病んで、引きこもつてゐたが、元氣をとり戻してからは、春の櫻の頃、雪の來る前にも、ひとりで、本宮まで參詣してゐたと、はじめて、わたしに打ち明けた。

わたしは、餘裕があつての遊山の一つに、友達の家では冬も暖かい紀州へ參詣するとばかりに思つてゐたので、行方不明の話は、ひとの家の隱しごとに觸れたやうで、すくなからず心を

打たれた。
わたしは、そのやうな熊野信仰については熊野誓紙、熊野願文といふ誓ひが古來から行はれて、千年も前の平安末期から、朝廷の御幸がずつと續いてゐるばかりでなく、民衆にも流布した信心は、嶮岨な山坂、波荒い黒潮の水路を超えてゆく修驗道でもあつたことを、ものの本で知つてゐる程度である。
それが今でも、さういふ苦難を祕めて、行方知れずの身内の消息を、何故か、熊野の奥に心あたりを求めてゐるのは、王朝が再起を賭した山地であるといふ土地柄に、夢をなぞらへてゐるのでもあらうか。
わたしは、信仰信心とは別に、言はば、探險ごころもあつて、千年も前からの古道が現存してゐる熊野路を辿つてみたいために、すでに、白濱で落合ふことになつてゐる教授夫妻と、十津川沿ひに、奈良まで同行する約束をしてゐた。
このひとの奥さんの家は、印南にある林業家で、持山の山番を案内にする手筈であつた。教授は大學で、藥學專攻の研究所員。友達の舞の上手なあさは、京都の木田家から、東京に嫁いで、長兄は、教授と同輩の、外科醫である。つまり、この外科醫の弟に當るひとが、失踪して行方不明になつてゐるのだ。

わたしは、友達から、この出來ごとを打ち明けられたとき、熊野路をゆくには願つてもない同行者として、すぐ、紹介の勞をとつて貰ふと同時に、案内の山番から、山に棲むひとの容子をきき出すことを頼まれた。頼まれなくとも、わたしにとつて、山番といふやうな、熊野山中の道に通じたひとの仕事には、好奇心と興味をそそられてゐたが、山番から、何故、いままでに容子をきかずにゐたのか、不審であつた。

あさは言ふ。

「父母の立場もあつて、行方しれずなどといふことを、兄夫婦の知りあひには頼めなかつたのです……私は、次兄が好きでした、ひとが好くて……今更、弟に行方不明者がゐるといふことで、兄にとかくのこともないと思ひますが、山番に、十年このかたの人の出入りなどたづねたいと考へたのは、私なのよ、ですから、あなたの好奇心で、山番の知つてゐることをきき出して下されば、一番、自然ななりゆきに思へて、お願ひする氣になりました、」

わたしは、好奇心が役に立つかどうかよりも、行方不明のまま、七年も經つてゐることに、人間の失踪蒸發といふ言葉を思ひうかべて、暗澹とした。

「私は、母が亡くなつてからは、何かないかぎり、木田の兄の家へも參りません、父も、なにかにつけて、家を出た弟のことを、兄に肩身せまく感じてゐるやうでしたから……」

雨の日と、日照りの日が交互につづいて、その年は、近年稀れな、松茸の出がよいときいた。京でも、年年に、松茸山がさびれて、茸狩りを宣傳しても、この頃は、時季にあはせて松茸を植ゑる。あらかじめ工作をした上での、茸狩りになつてゐる。

地山と言つても、これも、近くは次第に山が荒れてしまひ、今では、丹波の山へでも行かなければ、ほんとの地のものはない。

丹波のどこへ行けば、地の松茸が生えてゐるかと問はれても、お内儀さんたちも、

「さあ、どこと言ふて、その年の天候次第ですわな、」

それほど不確かな松茸を、どうしても、その時季には、一度は口に入れたい。たいした榮養があるわけではなし、香りと言つても、ぷんぷんするほど匂ふではなし、味と言つても、珍味といふほどのことはない。

それなのに、秋になれば、松茸を食べなければならないやうな、食べなければ淋しいやうな氣になる。しひ茸、しめぢ、はつ茸、いろいろうまい茸もあるのに、茸狩りと言へば、松茸なのである。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com